

納税は愛を継ぐ

学校法人川島学園れいめい中学校 3年 重永 樹里

「ばあば、頑張ったね。ありがとう。」

家族が見守る中、祖母の鼓動は停止した。祖母は最後まで生き抜き、命を全うした。

私が小学校五年生の時に、祖母は亡くなった。幼かった私は、入院している祖母に会うことすら許されなく、大人も厳しい時間制限があった。例え患者が危篤状態だとしても、例外などない。またコロナ陽性患者は、お骨になって初めて家族と再会が叶う状態となる。コロナ禍は今までの常識を変えてしまった。家族が、最後の時間を一緒に過ごせないなんて間違っている。誰に怒りをぶつけたらいいのか分からぬ苛立ち。祖母の寿命はコロナ禍の収束を待ってくれそうにない。

祖母の限りある時間を大切にする為に、この不条理を乗り越えようと、私達家族は話し合った。介護保険を使い、祖母を看取る大きな決断をした。老人ホームで働く母が断言する。介護保険は、祖母の尊厳や家族が抱えるあらゆる負担、何より家族の絆を守ることができると。また、介護保険は税金から成り立ち、経済格差に左右されず、誰でも分け隔てなく受けられる。私達の命綱だとも言った。

祖母は、介護支援専門員・介護士・介看師、福祉用具専門相談員・衛生師・医科と歯科の主治医の七つの職種で構成してもらった。寝たきりだった祖母の体温や血圧、その他脈拍呼吸など体調管理をし、次にやるべきことを示してくれる。家族が置き去りにならないよう、詳しく説明し判断を委ねてくれた。いつしか、家族も支援チームの一員となっていた。

祖母一人に、どれだけ多くの人が支えてくれたのだろう。祖母を通して、改めて人は独りでは生きられないものだと学んだ。税金の恩恵は、私達家族の望みを叶え後悔のない時間を過ごすことができた。祖母が亡くなった時、大きな淋しみの中にも全力で祖母を支えてくださった支援チームに、大きな感謝の気持ちで一杯になった。

税金は、社会保証となり当たり前のように誰かの助けとなっている。現代社会は、自分の生き方や在り方を決め、うやむやにせず最後を迎える場所を選択できる。だからこそ、税金は多様化する選択の架橋となり、私達の生きる礎となっている。税金が高いと不満を言う人は、一つの方向でしか見ていないと自分に問うてみて欲しい。自分を優先して欲しい余りに、自己都合を強く主張しているだけではないか。

私の祖母が税金で支えられたように、私も誰かの一助となりたい。社会に役立つ納税をする為には、勉学に励み経験を積み、目標とする将来の夢を叶えることだ。これが今の私にできること。納税は、未来を創り継ぐ価値ある義務であり、人への愛であると気付いた。

現代を生き抜く私達が、社会の担い手として喜んで納税したい。愛があふれる社会保証を、全ての国民が受けられるように。